

Vol.58-63

2024.7-2026.4

この先へと続く歩み

地域創生、グローバル化、教育改革などをテーマに、社会の中で果たす大学の役割を多角的に発信。「広報しまだい」は63号で役目を終え、新たな時代に向けた媒体へと変化します。



2024 先端材料研究開発協創機構を設置

2025 産学協創インキュベーションセンター竣工

Vol.31-44

2017.1-2020.4

島根大学の強みを発信

研究拠点や教育の特色など、島根大学ならではの強みや挑戦を掘り下げて紹介。大学の方向性や研究力を、より立体的に社会へ伝える広報へと進化しました。



2017 人間科学部設置

2018 内閣府「地方大学・地域産業創成交付金」に「先端金属素材グローバル拠点の創出 - Next Generation TATARA Project -」が採択



2016 大学院教育学研究科に教育実践開発専攻(専門職学位課程)を設置



2015 地(知)の拠点大学による地域創生推進事業(COC+)採択



Vol.20-30

2014.4-2016.10

地域とともに歩む大学

産学連携や地域連携の取り組みが広がり、大学が地域社会とどのように関わっているのかを伝える特集が増えていきました。



2023 材料エネルギー学部を創設



2023 島根大学ロゴマークリニューアル



Vol.45-57

2020.8-2024.4

変化する社会に対応し続ける

コロナ禍を経て、教育・医療・研究の現場が社会と強く結びつく時代に。変化の中で大学が果たす役割や、現場の声をリアルタイムで伝えてきました。



2023 材料エネルギー学部を創設



2023 島根大学ロゴマークリニューアル

次ページへ



「広報しまだい」では、大学の出来事とともに、大学での学びを経て、さまざまな分野で活躍する人たちの姿を伝えてきました。

次ページからは、これまで本誌に登場した卒業生の中から4人に取材し、島根大学での学びと、その後の歩み、そして現在について紹介します。

特集 1

大学と地域・社会の懸け橋として「広報しまだい」が伝えてきた、大学の姿

「広報しまだい」は、2005年の創刊以来、国立大学法人化や島根医科大学との統合後の新たな歩みとともに、本学の教育・研究の成果、学生・教職員、卒業生の活躍をお伝えしてきました。大学と地域・社会をつなぐ媒体として、その時々々の「今」を切り取ってきた本誌も、今号をもって最終号となります。本号では、「広報しまだい」の歩みを振り返るとともに、過去に登場いただいた方々の現在の姿をお届けします。

長きにわたり「広報しまだい」をご愛読いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。4月より本誌はデジタル版として生まれ変わり、地域や社会に向けて、より積極的に情報発信を行ってまいります。今後とも島根大学の活動に関心をお寄せいただけましたら幸いです。

島根大学長 大谷 浩



Vol.07-19

2010.11-2014.1

卒業生との対話から大学を語る

卒業生と学長によるスペシャル対談を軸に構成。大学での学びが、その後の人生や仕事にどうつながっているのかを掘り下げて伝えました。

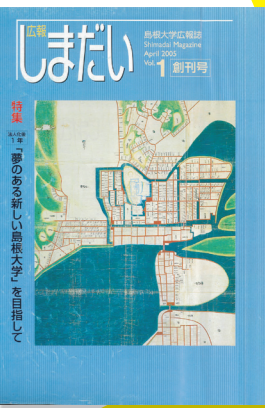


Vol.01

2005.04

2005年4月創刊

2004年の大学再編から1年。新たな島根大学としての歩みを届けるものとして創刊。大学の教育・研究・医療の姿を、地域に広く伝える広報誌としてスタートしました。



2004 国立大学法人法の施行により、国立大学法人島根大学となる

Vol.02-06

2005.12-2010.8

大学の「いま」を社会へ

地域で活躍する学生や地域貢献の取り組み、教員の幅広い研究の紹介など、その時々々の大学の動きを紹介してきました。



2011 附属病院新病棟完成式典



2013 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)採択



西日本旅客鉄道株式会社 経営戦略部
小川 千春 さん (現姓は竜田)
島根大学 法文学部 社会文化学科 2009年卒業



当時の記事
「広報しまだい」vol.04 2009年3月号より
「しまね観光大使」に選ばれ、地域の中で活動する学生として紹介。学業と両立しながら、「しまねの顔」としてPR活動する姿が表紙を飾りました。



企業の思いを、社会に伝える。

島根県出雲市に生まれ、幼いころから「地元で暮らしたい」と思っていたという小川千春さんは、現在、大阪梅田に本社を構える西日本旅客鉄道株式会社（JR西日本）に勤務。本社で企業全体の方向性や価値を社内外に伝える部署に所属しています。戦略に関わる企画や情報発信を担う中で、島根大学時代に経験した「しまね観光大使」などの活動を通して培ってきた視点が活かされています。

17 years later

島根大学で見つけた、幅広い視野



ずっと抱き続けた

「地元が好き！」という思い
出雲で生まれ育ち、美しい風景や城下町の空気が、温かな人との関わりなど、地元への思いが強かったという小川さん。進学にあたっては、「地元の国立大学である島根大学へ行こう」と、それ以外の進路は考えてもいなかったんです」と話します。他県から進学してきた友人の言葉や、社会学や地理学における地域活性化などの学びによって、幼い頃から身近だった風景や人の営みをあらためて言葉にし、捉え直す時間を積み重ねていきました。



観光大使としてのPRイベントのひとつ。「失敗したり悩んだりしたこともありましたが、すべての経験が私の大切な宝物」と小川さん。

もっと多くの人に知ってほしい。そんな率直な思いからスタートした観光大使としての活動を通じて、より深く地元の魅力を知ることができました。一方で、東京や大阪でPR活動する機会が増えたことで、島根以外の地域の魅力も知ることができたとはいいます。

学業とアルバイト、そして就職活動とも並行しての観光大使の活動。「びっくりするほど忙しかったけれど、多様な視点が身につけられた貴重な経験だった」と振り返る小川さん。地元では当たり前の風景や文化が、他の地域の人にとっては新鮮に映ることを知ったのも大きな学びになりました。

現在の勤務先である西日本旅客鉄道株式会社（以下、JR西日本）も、観光大使として活動する中で出会った企業。地域に根ざす仕事を希望していたため「公共交通を担うだけでなく、地域観光や活性化にも力

を入れていくと知って興味を持つようになりました。地元愛から担った観光大使の活動が、将来へと結びついた瞬間でした。

培った視点を企業の中で生かす選択

JR西日本に入社した小川さんは、鳥取県内にある米子支社（現在の山陰支社勤務から社会人としての一歩を踏み出しました。学生時代から親しんできた山陰地域で「働く側」となったことで、通勤の道や駅の風景、利用する人たちの表情などが、これまでとは違って見えるようになったそう。地域に暮らす人たちの生活を企業の一員として支える業務の中で、大学時代に培ってきた視点が活かせる機会も増えたといえます。

地域の暮らしと鉄道が密接に結びついていることを実感した支社での勤務を経て、2016年には大阪・梅田にある本社へと異動。現在は、JR西日本グループのパスである「私たちの志」を社内外へと発信する仕事に従事しています。お客様に企業イメージを伝えるCMの制作や放映、社内に向けた社内報の記事作成、社員参加型のワークショップの運営など、その業務は多岐に渡りますが「社会における企業の存在価値やありたい姿を伝えるために、さまざまな方法を考え、多くの人たちとカタチにしていくのは大変だけれど楽しい」と話す小川さん。



フリーアナウンサー・シンガーソングライター
森光七彩さん

島根大学 法文学部 社会文化学科 2016年卒業



当時の記事
「広報しまだい」vol.22 2014年10月号より
小学生の頃に作詞した「アオギリのうた」の作者として紹介。広島市にある母校で開催されたコンサートの様子とともに「アオギリのうた」の歌詞も掲載されました。



声と音楽で、
笑顔をつないでいく。

生まれ育った広島を拠点にフリーアナウンサーとして活動する森光七彩さん。ラジオパーソナリティや番組ナレーターを務める一方、シンガーソングライターとしての演奏や指導にも携わるなど、表現の幅を広げています。ふたりの男の子の母としての顔も持つ森光さん。現在の姿をたどっていくと、島根大学で過ごした4年間で、いまの働き方と生き方を支えていることが見えてきました。

「いい子でいなくていい」
時間がくれたもの
広島で、子どもたちを中心に歌い継がれている「アオギリのうた」という曲があります。平和への願いを込めたこの歌は、広島市内の学校行事や集会など、さまざまな場面で親しまれてきました。この歌を小学生の頃に作詞したのが、森光七彩さんです。「アオギリの子」と呼ばれ、周囲から注がれる期待の中で過ごす日々。中学、高校でもそのイメージは変わらず、知らず知らずのうちに「ちゃんとしていなければ」「いい子でいなければ」と意識するようになっていました。



らスタートした大学生活だった」といいますが、その島根での生活が思いがけず多くのものをもたらします。「島根では誰も私のことを知らなかった。おかげで肩の力が抜けたんです」。特別な肩書きから離れ、ひとりの大学生として過ごせる日常がありました。

森光さんが本来の性格を取り戻したきっかけは、大学で出会ったダンスサークルの友人たちでした。鏡のある場所を探しては踊り、練習に明け暮れる毎日。副部長としてサークル運営にも関わり、人前に立つこと、仲間と何かをつくることの難しさや楽しさを経験したそう。また、教育実習での授業づくりやアルバイト先で任されていた館内放送など、人に伝えること、相手と向き合うことを繰り返して

12 years later

島根大学で見つけた、本来の私



返し体験する中で、自分が目指したいことが見えてきたと話します。
「東京に進学していたら、重圧からずっと逃れられなかったかもしれません」。森光さんにとって島根大学で過ごした4年間は、周囲から与えられていた役割や期待から少し距離を置き、自分自身を取り戻していく時間でした。大学時代の経験が、現在の森光さんの基盤になっています。

島根で育んだ自分らしさを、
いまの暮らしへ
卒業後の進路を本格的に考えるようになった頃、森光さんは偶然、NHK広島のカスタマー募集を目にします。ダンスサークルの友人に教室で撮ってもらった写真を添えて応募したところ、採用が決定。卒業式の翌日には生放送の現場に立つことができました。

取材の現場では、表面的な言葉だけでなく、その人が何を考え、何を伝えたいのか、その背景や思いに耳を傾けることが求められます。大学のインタビュー実習などで培った「相手の話をじっくり聞き姿勢」が、そのまま仕事に生かされていきました。授業やサークル、アルバイトなどで人の話をじっくりと聞いた経験が、現場での判断や言葉選びの土台になりました。
NHKで経験を積んだのち、フリーアナウンサーとして活動を始めた森光さん



鍵盤奏者の父、東京で活躍するベーシストの弟とのコンサート風景。将来は息子たちも含めた「3世代演奏」を実現することが目標とのこと。

ん。局や番組ごとに求められる役割は異なりますが、取材や番組制作を通して、地域で暮らす人の声や出来事に耳を傾け、言葉として届ける姿勢は変わりません。第二子が生まれたばかりの現在は、仕事の量を調整しながら、決まった時間にスタジオへ向かい、収録を終えたら日常に戻る。そんなリズムの中で、仕事と暮らしを歩き来しています。
大学時代に培ってきた、人と向き合う姿勢や、新しいことへの挑戦と経験。パートナーとの出会いも島根だったという「島根大学に行ってなかったら夫にも息子たちにも出会えていないと思う」と感慨深く……。島根での時間は、私にとってかけがえない時間でした」と笑顔で振り返る森光さん。日々の仕事と暮らしの中で、島根で紡がれた縁に支えられながら、自分らしく歩み続けていきます。

広島エフエム放送「H-Junk Factoryのものづくりラジオ」(毎週木曜日18:00~)に出演中

株式会社ナチュラニクス代表取締役 金澤 康樹 さん

島根大学 総合理工学研究科博士後期課程 2016年修了



**島大発！ベンチャー企業 Vol.02
電気自動車界に旋風を巻き起こす！**

今年10月、島根大学工学部理工学系で2年連続で金澤康樹さんが、株式会社ナチュラニクスを設立。今年10月、島根大学工学部理工学系で2年連続で金澤康樹さんが、株式会社ナチュラニクスを設立。今年10月、島根大学工学部理工学系で2年連続で金澤康樹さんが、株式会社ナチュラニクスを設立。

「電気自動車（以下、EV）は、バッテリーが重く、充電時間も長い。従来の鉛酸バッテリーよりも、充電時間が短く、重量も軽くなる。EVの普及には、充電時間の短縮と重量の軽減が鍵となる。ナチュラニクスは、充電時間の短縮と重量の軽減を実現するために、GaN半導体を使用した電気自動車の開発に取り組んでいる。」

当時の記事
「広報しまだい」vol.26 2015年10月号より

島根大学発ベンチャー企業2社目として起業した学生として紹介。大学や地元企業のバックアップを受けて事業化を進めた経緯や会社の事業内容について伺いました。



技術×ビジネスモデルで、世界中に電気を届ける。

島根大学在学中に立ち上げたスタートアップ企業の代表として、現在も国内外の企業や行政と連携しながら事業を展開している金澤康樹さん。大学での研究を起点として、社会課題の解決へとつなげる事業に取り組んでいます。研究者ではなく経営者という道を選び、研究成果を社会に実装していく道を選んだ金澤さん。その選択の背景には、島根大学で過ごした時間と経験がありました。

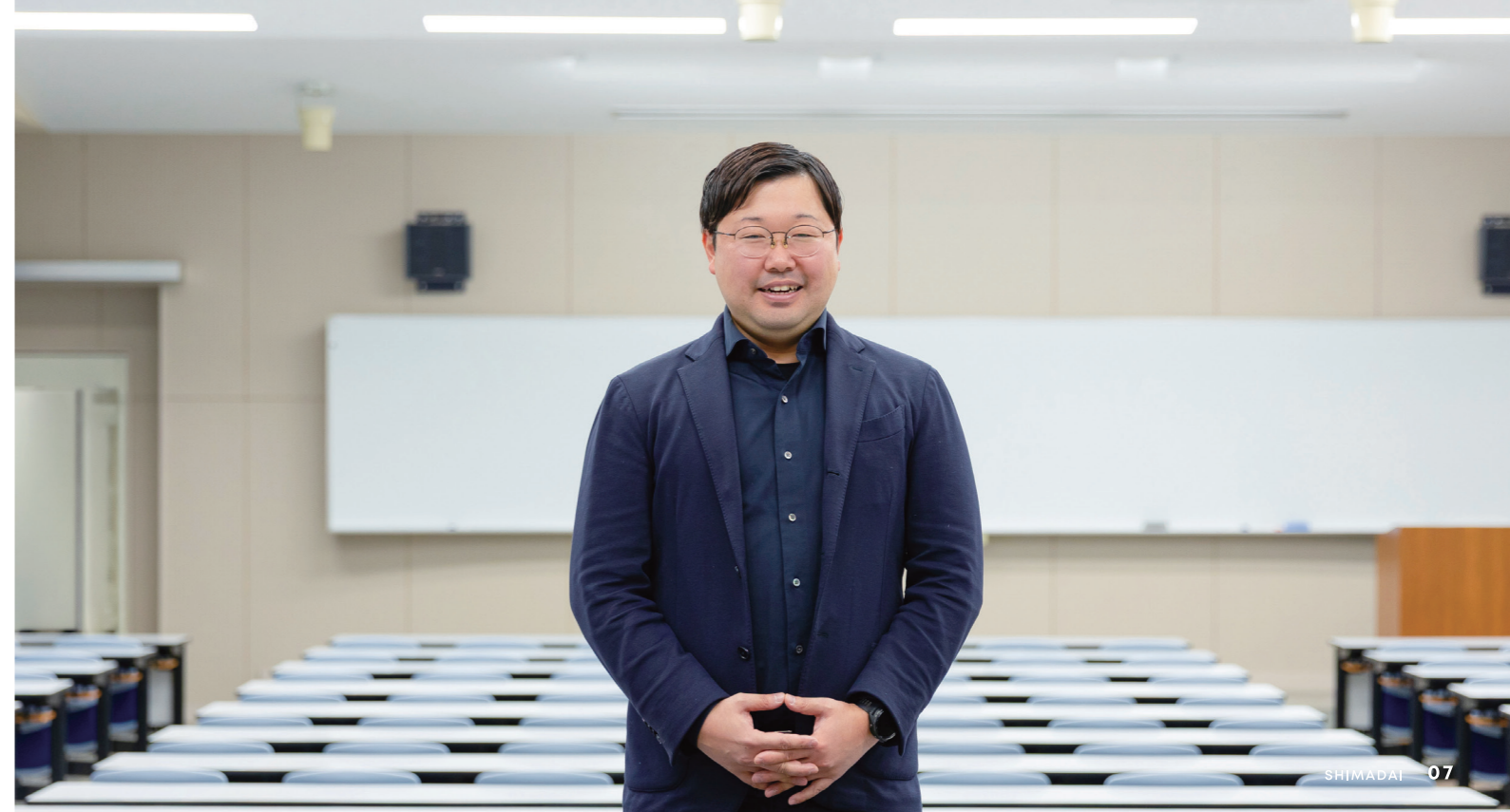
「この先生に学びたい」と選んだ進路
金澤さんが、現在の事業にもつながる研究に関心を持ったのは高校時代。自動車産業の盛んな愛知県で生まれ育ったこともあり、自然と自動車の開発に興味を持つようになったといいます。中でも、金澤さんが強く惹かれたのが、電動化が進む自動車を支えるパワーエレクトロニクス。「その第一人者である山本真義准教授（当時）の研究室で学びたい」。その思いから、島根大学への進学を決めました。



名古屋大学トヨタ講座の塩崎先生（写真右）の研究グループと共に、世界で初めてGaN半導体を使用して電気自動車を駆動させた思い出深い記念写真。

11 years later

島根大学で見つけた、世界との接点



何度も行き来する日々。共同研究先として関わった企業数は30社を超えました。
社会実装に向けて加速し続ける日々
株式会社ナチュラニクス設立から10年経った現在も、長寿命で高効率なエネルギー技術の研究開発という事業の軸は当時のまま。企業や行政と連携して実証実験を重ね、社会に導入するための仕組みづくりに取り組んできました。

これまでに、日本製リチウムイオン電池をベースにしたバッテリーパックや充電器を独自に開発してきたナチュラニクス。現在は、大手企業との協業のもと、電動バイクタクシー向けのバッテリーサブスクリプションサービスの実証実験に取り組んでいます。2024年には、タイ・バンコクにおいて、電動バイクタクシーのドライバーを対象としたバッテリーサービスの実証実験を実施。高温多湿という気候条件や現地の利用実態を踏まえながら、サービスとしての使い勝手についての検証を進めてきました。さらに2025年12月からは、対象となる台数やエリアを拡大し、サービス提供のあり方も視野に入れた本格的な実証段階へ。実運用に近い形で検証を重ねながら、バッテリーサービスが事業として成立しうるかどうかを見極めるフェーズに入っています。



単に論文を書くための研究ではなく、実際の現場で使われることを前提に考える。複数の企業や関係者と調整しながら、一つのプロジェクトを前に進めていく。その経験は、学生の立場でありながら研究と社会との距離を具体的に感じる時間でもありました。
研究に没頭する中で「この結果を社会で役に立つ形にしたい」という思いが湧いてきたという金澤さん。地域に島根大学の研究シーズを社会に活かそうという機運があり、制度や地域の雲州志士会というネットワークが整っていたことも、経営者として社会実装を目指す決意を後押ししたといいます。

「広報しまだい」に取り上げられたのは、株式会社ナチュラニクスを設立し、社会実装へのスタートを切った時期でした。学生のうちから企業との共同研究やプロジェクトに関わり、研究の現場と社会の接点を



